Osaka University Knowledge Archive

Title	ラシーヌ『ブリタニキュス』の終結部に関する一考察 : ヴェスタ聖女ジュニーをめぐって
Author(s)	藤本, 武司
Citation	Gallia. 2002, 41, p. 9-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5582
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ラシーヌ『ブリタニキュス』の終結部に関する一考察
——ヴェスタ聖女ジュニーをめぐって[1]——

藤本　武司

Ⅰ．序

ラシーヌの『ブリタニキュス』は、1669年の初演時から様々な批判を受けたが、中でも終結部 dénouement については今なお議論が絶えない。ネロンの指示による皇子ブリタニキュス毒殺の顛末をビュリュスに語らせたあと、ラシーヌは、その恋人ジュニーがヴェスタ聖女となる経緯と、ジュニーを失ったネロンの様子を、アルビーヌのレシという形で挿入した。ヴェスタ聖女の件については、「キリスト教的悲劇と呼ばれかねない[2]」要素が確かに認められ、また、そもそも「劇はブリタニキュス毒殺で終わっているのだから、あとを聴く必要はない。」[Préface, p. 374]との非難にも一理ある。現代においてもプレイアード新版の編集者フォレスティエが、ジュニー隠遁のアナクロニズムを批判し[3]、ガルニエ新版を編集したヴィアラもここにジュニーの「純粋無垢の印[4]」以上の意味を認めていない。一方、この毒殺事件の直後にジュニーがネロンと直接言葉を交わす5幕6場も、かつて『ル・シッド』が非難されたのと同じ理由によって槍玉にあげられたが、これについては、作者自ら「序文」で弁明をしているにもかかわらず[Préface, pp. 373-4]、後の版であっさり削除してしまった。しかし、我々が問題にしている部分は決して削ろうとはしなかったのである。このような抵抗は、作品にとって必要欠くべからざる要素がここに隠されていることを窺わせる。本稿は、ラシーヌがこの「ヴェスタ聖女ジュニー」を作品の最後に据えた意図をさぐるための一試論である。

Ⅱ．アウグストゥスの後裔ジュニー

ラシーヌは作品の序文において、ジュニーの源泉を示しており、第一の序文ではセネカとタキトゥスを、第二の序文ではこれにスエトニウスを加えてその典拠

1）本稿において、ラシーヌ自身によるテクストからの引用は原則として Racine, *Œuvres complètes*, tome I, éd. par George Forestier, Gallimard (Pléiade), 1999（1670年の初版を主テクストとして収録）を底本として用い、各引用の直後に、作品名、行数を[ ]に入れて示す。なお、本論述の主たる対象作品である *Britannicus* については、作品名を省略する。また、*Britannicus* の Préface から引用する場合は底本のページを記す。

2）Boursault, *Artémise et Poliante*, cité par George Forestier, *op. cit.*, p.440 (autour de *Britannicus*).

3）George Forestier, *op. cit.*, p. 1414 (notice).

4）この表現はガルニエ版ではなく、Racine, *Britannicus*, commentaires et notes d'Alain Viala, Le Livre de Poche, 1986, p. 125 (commentaires)による。

としている。史実では、彼女はアウグストゥスから女系を四世代下ったユニア・カルヴィナで、アグリッピーヌによるネロ擁立の過程で殺されたシラヌスの妹にあたる。もちろん、これらの歴史記述のいずれをとっても、彼女がブリタニキュスの許婚であった事実は報告されておらず、またネロが彼女に横恋慕をしたという事実もないが[5]、ラシーヌが彼女を帝位簒奪者ネロンに配したのは、アウグストゥス直系の血筋ゆえであることは容易に想像がつく。しかも、彼女が「あまり知られていない人物」だけに、より一層創作の自由が許されるからでもある[Préface, p. 373]。

ただ、彼女の出自を示すラシーヌの詩句は、他のラシーヌ作品を含めたラシーヌ的劇構造を考えるうえで、より重要な要素を我々に示唆している。

[...] une Fille / Seul reste du débris d'une illustre Famille [555-556][6]
[...] une Fille / Qui vit presque en naissant éteindre sa Famille [611-612]

いずれも、一族皆殺しになったその最後にのこる唯一の生き残りとしての資格が強調されている。この資格をもった人物はラシーヌの他の作品にも登場するもので、『アンドロマック』のアステュアナクス、『フェードル』のアリシー、さらに『アタリー』のエリアサンことジョアスの場合と同じである。彼（女）達は場合によっては副次的人物の地位に甘んじているが、すべて劇の最後において、一族滅亡の際から復活して、本来の地位を回復する点において共通している。そこには正統な者による秩序の回復 restauration という古来の悲劇に繰り返しあらわれるテーマが内包されており、この意味において、ジュニーもまた神君アウグストゥスの築いた秩序の復活を担う人物として位置付けることができる。

従って、問題のレシでは、最初にアウグストゥスとジュニーの関係が確認される。ブリタニキュスが殺された直後、「宮殿の外」へ出たジュニーが神君アウグストゥスの像にすがって祈る場面である。

D'abord elle a d'Auguste aperçu la statue;
Et mouillant de ses pleurs le marbre de ses pieds
Que de ses bras pressants elle tenait liés; [1728-30]

神君アウグストゥスの大理石像は『年代記』のネロの項に言及されているが、「大

5）Volker Schröder は、史実上の許婚であるオクタヴィアとシラヌスの関係から着想を得て、そのアナロジーとしてそれぞれの兄弟姉妹であるブリタニキュスとユニア・カルヴィナの関係が創出されたとする興味深い意見を提示している。Volker Schröder, *La tragédie du sang d'Auguste, Politique et intertextualité dans Britannicus*, Gunter Narr Verlag (Biblio 17, n° 119), Tübingen, 1999, pp. 183-4.なお、本考察は Schröder の著作に多くを負っている。

6）この詩句はセネカ作と誤り伝えられている『オクタヴィア』中で、主人公がおのれの出自を語る一句« magni resto nominis umbra » [Sénèque, *Tragédies*, texte établi et traduit par Léon Herrmann, Les Belles Lettres, 1967, tome II, Pseudo-Sénèque, *Octavia*, vers 71]と酷似しており、先の註にあげた Schröder の意見を傍証するものといえる。

理石」と「アウグストゥス」のつながりは、まずなによりも、この初代皇帝が「ローマを煉瓦の町として引き継ぎ、大理石の都として残すと自ら誇った」[7]というスエトニウスの報告を想起させる。末永く存続すべきローマの基礎を築いたこの皇帝を、ラシーヌの詩句はジュニーその人によって今現在によみがえらせようとする。あえて「足」ではなく「大理石を濡らす」と言うことで、流れる涙と、硬い大理石という対照的な質感の出会いを印象付け、ジュニーの嘆願によって、物言わぬ冷たい石像がほとびるごとく命を得る準備がなされる。これにより「涙」はもう一つの体液である「血」を通わせる動因となり、加えてまた、pieds/liés の鋭い母音による押韻が pressants の意味内容を過剰に強めて、両者の物理的結合からこの血のつながりを現在に呼び戻そうとするのである。

Ⅲ．民衆に保護されるジュニーとネロンの孤独

ジュニーの嘆願に続く民衆の突然の登場は、そこに直接的な因果関係を欠き、超越的な力の介入を窺わせるが、それは神君アウグストゥスに由来するものであることは、上の分析から納得できよう。涙ながらに嘆願するジュニーに驚いた民衆が、彼女のまわりに集まり、その涙に同情をよせる。

Le Peuple cependant que ce spectacle étonne,
Vole de toutes parts, se presse, l'environne[=Junie],
S'attendrit à ses pleurs, et plaignant son ennui
D'une commune voix la prend sous son appui. [1759-62]

この一節がもつ政治的な意味を認めるか否かによって、作品の解釈は大きく変わる。問題は民衆の「一致した声」という一句であろう。ここで、3幕8場、ローマの意向についてネロンとブリタニキュスがやりあう stichomythie を思い出そう。ネロンが「少なくともローマは黙っている。その沈黙を見習え」[1052]と言うように、その支配力はローマの沈黙を前提としている。奸臣ナルシスが、迷うネロンにブリタニキュス殺害を決心させた説得も、「ああ、やつらを黙らせたいとお思いになりませんか」[1479]という一句で締めくくられていた。ところがいまやローマは沈黙を破り、アウグストゥス直系の娘を「声を揃えて支持し」ようとする。ここにネロンの支配力がもはや民衆を抑えられなくなったことが示される。このあと、ネロンはローマ、民衆との関係において、ジュニーと鮮やかな対照をなして描かれる。沈黙するのは今度はネロンである。「その人を寄せ付けない沈黙に、皆が逃げ出します。」[1775]という句に続いて、「目はうろたえて、錯乱したまなざしで天を仰ぐこともできず」[1777-8]という行が神性の裏づけをもたぬ皇位簒奪者を糾弾し、最後に「夜になって孤独がつのれば」[1779] という表現が、ローマから独り見捨てられた彼の姿とともに、時の単一を遵守するこの悲劇の終わりを告げ

7）Suétone, *Vies des douze Césars*, texte établi et traduit par Henri Ailloud, Les Belles Lettres, 1961-64, tome I, *Divus Augustus*, XXVIII.

るのである。

ところで、この作品については、ネロンとジュニーの関係がもっぱら恋愛の側面から考察され、政治的な面からの分析はあまり見られない。これは、ブリタニキュス対ネロン、アグリッピーヌ対ネロンという政治的対立があまりに目立つためであるが、加えて、ジュニーという人物が、その出自にも拘わらず、全くの私人として捉えられる傾向が強いからでもある。しかし彼女とアウグストゥスとの関係から考えれば、この人物のもつ政治的意味を無視できないことは明らかであろう。実際、アウグストゥス対ネロンの対照的関係は、作中で明確に表現されているからである[8]。我々は、この点を考察するために、詩人が彼女に与えたもう一つの資格、つまり「ヴェスタ聖女ジュニー」の意味するところを考えねばならない。

Ⅳ. ヴェスタ聖女ジュニー

サント・ブーヴは、ラシーヌがジュニーをヴェスタ聖女にしたことについて、「民衆が誰かをネロンの下にかくまうようなものだ[9]」と述べたが、彼の本意は別として、この言葉はヴェスタ聖女の性格を正確に表現しているといえる。つまり、ヴェスタ礼拝が皇帝の公的権力と不可分の関係にあったということである。一方で、これをキリスト教の修道女のような資格として捉えたものが多かったことは、ブルソーの批判から窺える。実際のところ詩人はヴェスタ聖女をどのようなものとしてとらえていたのか。この点についてラシーヌは明言していないが、彼が参照したと思われる源泉に遡って推測することは可能であろう。ラシーヌが源泉として具体的に名をあげているのは Aulu-Gelle のみであり、序文の中でヴェスタ聖女として受け入れられるのが 6 歳から 10 歳までの少女に限られることを、この碩学の作品、*Nuits Attiques* を典拠に述べ[10]、ジュニーがこの条件を満たしていないことを自ら指摘、弁護することで予想される批判に先手を打っている[Préface, p. 375]。しかし我々にとってより重要なのは、ラシーヌが参照した同じ章の後半にある、大祭司が新たにヴェスタ聖女を受け入れる儀式の言葉についての言及である。彼女たちが、「ローマの市民のために」« pro populo Romano Quiritibus »[11] ヴェスタ礼拝を行うべく定められていたことがそこから分かる。このような、ローマの民衆とヴェスタ聖女との結びつきがラシーヌの念頭にあったとすれば、問題

8) Enfin Néron naissant / A toutes les vertus d'Auguste vieillissant.[29-30], Il[=Néron] commence, il est vrai, par où finit Auguste./ Mais crains, que l'avenir détruisant le passé, / Il ne finisse ainsi qu'Auguste a commencé.[32-4] この対比はセネカにその源泉を求めることができる(Sénèque, *De la Clémence*, texte établi et traduit par François Préchac, 3e éd. Les Belles Lettres, 1967, IIe partie, § 2.)。また、アウグストゥスの治世の初めと終わりが区別されるのは、コルネイユの『シンナ』を意識してのことであろう。

9) Ch. A. de Sainte-Beuve, *Œuvres*, éd par Maxime Leroy, tome I, Gallimard (Pléiade), 1956, p.735.

10) Aulu-Gelle, *Les nuits attiques*, texte établi et traduit par René Marache, Les Belles Lettres, 1967, tome I, Livre I, XII,1.

11) *Ibid.*, Livre I, XII, 14.

の終結部の詩句はごく自然なものとして受け入れられる。一方、スエトニウスの報告では、アウグストゥスが、劇場における特別席を彼女たちのために新設するなど[12]、ヴェスタ聖女の特権を強化し、みずから「私の孫のなかに、年齢の上で選ばれる資格のある娘がいたら、その孫娘をヴェスタ聖女に提供するだろう[13]」とまで誓ったという。さらに、ネロがルブリアという名のヴェスタ聖女をかどわかしたという記述[14]。これがネロンのジュニーに対する恋を詩人に思いつかせた契機のひとつかもしれない。しかし、何よりも興味深いのは、アウグストゥスの遺言状がヴェスタ神殿に保管され、皇帝の死後封印を解くために元老院へ持参したのもヴェスタ聖女であった[15]という報告である。ヴェスタ聖女がアウグストゥスの遺志を伝える使者となることは、ラシーヌの作品におけるジュニーの役割と密接に関係すると考えざるを得ない。

これらの源泉からは、ヴェスタ聖女が、単に神聖な役割を帯びているというだけではなく、あくまで公的な存在として、数多くの枢要な国家的行事に直接係わっていたということ、その活動の場は外との交渉を絶った修道院のような場所とは異なり、ローマの Forum の空間に属していたということが窺われる。かつてゴルドマンは、この場を「「世界」の周辺」と捉えたが[16]、むしろ「世界」と対峙するより大きな世界と考える必要がある。

ヴェスタ礼拝については、上にあげたものの他に、オヴィディウスの「祭暦」が極めて詳細な情報を提供している。ラシーヌはこの作品も読んでいたと考えられるが[17]、そこには他のギリシャ・ラテン散文作品に記述された内容に加えて、ヴェスタ礼拝がローマ建国と密接にかかわっていること、この神格がトロヤ起源であることが述べられている[18]。このことは、ヴェスタ聖女ジュニーの引き継ぐものが、アウグストゥスのローマ継承という歴史的側面だけではなく、神話的ローマにまで及んでいることを示す。そして、アウグストゥスの徳性もまた、その神話の一部として、彼女の中に体現されることになるのである。

V．二つの結末

ところで、ジュニーが民衆に保護される上の場面は、ビュリュスがネロンにブリタニキュス殺害を思いとどまらせようとして語る 4 幕 3 場の数行に対応している。そこでは理想的な皇帝の姿が、これまでのネロンの善政を描写する形で提示

12) Suétone, *op. cit.*, tome I, *Divus Augustus*, LXIV.

13) *Ibid.*,XXXI.

14) *Ibid.*, XXVIII.

15) *Ibid.*, CI.

16) Lucien Goldmann, *Le dieu caché*, Gallimard, 1955, p. 370.

17) Schröder は Le Vasseur に宛てた 1661 年 6 月付け書簡を根拠に、ラシーヌが『祭暦』を読んでいたと推測する。Schröder, *op. cit.*, p. 262 (note).

18) Ovide, *Les fastes*, texte établi, traduit et commenté par Robert Schilling, Les Belles Lettres, 1992, tome I, Livre III, 29.

されていた。

Quel plaisir de penser et de dire en vous-même, / « [...] /
Je vois voler partout les cœurs à mon passage! »
Tels étaient vos plaisirs. Quel changement, ô Dieux! [1359, 1364 et 65]

さらにこの 1364 行目がセネカの『寛容論』の一句「民衆はあたかも輝く至福の星へ向かうように、われ先に走りよる」« tanquam ad clarum ac beneficum sidus certatim advolant[19] .» を下敷きにしていることはよく知られている。ラシーヌは、ラテン詩人の用いた[ad]volo にあたるフランス語の動詞 voler を媒介として、二つの場面のつながりを印象付けているわけである。4 幕 3 場では、ビュリュスはネロンの前に相反する善悪二つの道を示して

Vous n'avez qu'à marcher de vertus en vertus.
Mais si de vos flatteurs vous suivez la maxime,
Il vous faudra, Seigneur, courir de crime en crime, [1342-4]

と述べるが、ネロンの選んだ道は結局後者であった。先の照応する二つの場と、ネロンの前にあった選択肢の対照的関係からみれば、民衆に保護されるジュニーの場面は、場合によってはありえたネロンの姿を描いたものともいえる。これは、『シンナ』の解決法でもある。とすれば、詩人は作品終結部において、二つの可能な結末を対照的に併置して観客に示したと考えられはしないだろうか。

このように考えると、続くナルシスの「犠牲」も無意味なものではなくなってくる。いわゆる「贖罪の山羊」の一変奏形と考えられるこの供犠の伝統的意味について、ここで深く立ち入る余裕はないが、詩人が生々しくも「ナルシスの不実な血がジュニー様に跳ねかかります。」« Son infidèle sang rejaillit sur Junie » [1772] と付け加えているところからも、犠牲によるジュニーの浄化という神話的意味をここに付与していることが窺われる[20]。一方で、ネロンの側からすれば、この犠牲は何ら浄化をもたらさずに、全ての罪を今後彼に背負わせるのみで、悲劇に何ら解決をもたらすものではない。彼は民衆を引き止めることもできず、独り宮殿へと戻る。「彼は引き返します」« Il rentre. » [1775]という、アレクサンドラン詩行のなかに半句にも満たずに完結した一文は、ジュニーのそれとは対照的なネロンの姿を浮き彫りにする[21]。ローマと皇帝との乖離が確実なものとなったことを、Forum とは隔絶された宮殿 Regia に幽閉されるネロンという形でラシーヌは描くのである。

19) Sénèque, *De la Clemence, op. cit.*, I, 3.

20) ナルシスが最後に犠牲となることは、作品中すでに sacrifice / Narcisse の押韻によって暗示されている[1411-2].

21) このような短文が、悲劇の決定的な行為、状況を示すことがしばしばある。たとえば、« Il sort. » [*Phèdre*, 1193] （フェードルが真実を告げないうちにテゼが去る。これによってイッポリートの死は確定する）。また、テゼの帰還を知ったフェードルの « Il vit. » [834], ロクサーヌの« Sortez.» [*Bajazet*, 1572]など。

Ⅵ. 二つの結末の「時」

宮殿に戻ったネロンの姿を描くに際して、ラシーヌはタキトゥスに拠っているが、彼が引いているのは実は、母アグリピーナの殺害後ネロンが自らの罪の大きさに恐れおののいて眠れぬ夜をすごす姿である[22]。ブリタニキュス殺害の時点ではもちろん彼は「まだ母を殺していない」[Préface, p. 372]。しかしラシーヌは未来の大罪を終結部に滑り込ませ、この時間的集約によって、劇中の語りをそのまま観客の視点と一致した歴史的語りへと移行させる。作品を締めくくるアグリッピーヌとビュリュスの台詞は、この時間的処理の仕上げをするものである。

AGRIPPINE Voyons quel changement produiront ses remords,
S'il voudra désormais suivre d'autres maximes.
BURRHUS Plût aux Dieux que ce fût le dernier de ses crimes! [1786-88]

単純未来で未決定なものとして無造作に投げ出されたアグリッピーヌの疑問。しかし« remords » も« maximes »もその意味内容はあらゆる可能性を含む複数形に置かれている。それに対応する留めの一句は「過去、現在、未来の縮約された[23]」複雑な動詞形をとって、すでに決定している過去を未来として示しながら、現在の視点をかろうじて確保しつつこの悲劇を締めくくる。しかも最後の押韻語となっている« maximes »と« crimes »は、先にビュリュスがネロンに示した二者択一のうち悪しき選択肢を表す2行[1343-4]で用いられた押韻語をそれぞれ複数形にしたものである。この巧みな繰り返しによって、詩人は一見曖昧とみえるこの結句に、ひそかに解答を与える。ブリタニキュス殺害はネロンが今後「罪また罪」を重ね、身を滅ぼしてゆくその「最初」のものにすぎないのだと。

歴史的語りの中へと返される一方の結末に対して、アウグストゥスの末裔が復活させる「ローマ」の時間構造はどうなるだろう。ヴェスタ神殿に祀られる聖なる火は、「ローマ」の守護神そのものであり、「ローマ」とともに永遠とされる。

Ils la mènent au Temple, où depuis tant d'années
Au culte des Autels nos Vierges destinées
Gardent fidèlement le dépôt précieux
Du Feu toujours ardent qui brûle pour nos Dieux. [1763-66]

ヴェスタ礼拝によって、ローマが「一致した声」« une commune voix »のもと一つとなることが、« *nos* Vierges », « *nos* Dieux »という表現によって表されている。一方、「何年も前から」とは、多くの研究者が註するように[24]、ロムルスとレムスの

22) Tacite, *Annales*, texte établi et traduit par Henri Goelzer, Les Belles Lettres, 1966, tome 3, Livre XVI, § 10.

23) Alfred Bonzon, *Racine et Heidegger*, Nizet, 1995, p.86.

24) Cf. George Forestier, *op.cit.*, p. 1440 (notes).

母がヴェスタ聖女であったことから、その起源はローマ建国以前に遡ることを示す。つまり、ローマの起源としてのトロヤにまで遡り、ヴェスタの火は神話的ローマの記憶として燃えつづける。とすれば、このもう一つの結末における時間構造はアウグストゥス神話、そしてさらにトロヤに遡るローマ神話の再現という意味において、回帰的なものとなろう。このことはまた、ヴェスタ神殿の火が、毎年旧ローマ暦の年始にあたる3月に新たにともされる[25]こととも対応しているのである。

ところで、「我らの神々のため絶えず燃える火」は、ネロンの未来と関係してはっきりとした対応物をもっている。「ネロンはまだローマに火を放っていない」[Préface, p. 372]が、作品中には明確な暗示が挿入されている。つまり，涙ながらにネロンを諫めるビュリュスの台詞「陛下がおつけになる火は，消すことのできないものとなりましょう」« Vous allumez un feu qui ne pourra s'éteindre. » [1351]がそれである。タキトゥスでは失われているが、スエトニウスの中で、誰もが知るこの「ローマ炎上」の件には、ネロが火焔の美しさに恍惚となり、舞台衣装をつけて『トロヤの略奪』を歌ったとある[26]。このようにして、2つの結末は、intertextualité のかなたにその焦点を結ぶのである。

* * *

本稿にて考察した二つの結末の対照的並置構造は、この悲劇における結末の曖昧さにひとつの根拠を与えることができる。不可逆的な歴史の時間に従う筋が閉鎖された悲劇空間の中に閉じ込められ、一方で円環的に回帰する神話の時間が、開放された空間に現前する。作品の dénouement においては、この二つの時空に属する結末が一つのタブローに収められ、対峙する両者の上に微妙な均衡を実現しているのである[27]。

（大阪大学助手）

25）Cf. Ovide, *op. cit.*, tome I, Livre III.

26）Suétone, *op. cit.*, tome III, *Nero*, XXXVI.

27）最後に、この考察結果がラシーヌの他の作品に適応される可能性として、最後の作品『アタリー』の場合について付け加えたい。両作品には多くの共通する要素があるが、ダビデの血を引く最後の生き残りであるジョアスが、『ブリタニキュス』におけるジュニーの資格を有していることは容易に想像できるだろう。しかしさらに作中では、大祭司ジョアドによって彼の将来の罪が予告されている。つまり、彼の中には，ネロンと同じ要素が込められている。テクストは現にこの神聖なる王を、ラシーヌがネロンを称するのに用いた言葉：「生まれつつある怪物」« monstre naissant » [*Athalie*, 603]で呼んでいるのである。この作品では並置されていた二つの結末が、そこでは一つに統一されていることが予想される。なお、詳細な考察は別稿に譲りたい。